

ジグムント・バウマン著、伊藤茂訳

『自分とは違った人たちとどう向き合うか 難民問題から考える』青土社（2017年）

“Strangers at Our Door”が原著の原題である。ポーランドのユダヤ人家庭に生まれ、冷戦下、大学職を追われた後にイギリスに亡命した社会学者である著者が、昨今の移民・難民問題と彼らに代表される「見知らぬ人々」との共生のあり方について論じている。“見知らぬ人が扉をたたいている”というイメージは繰り返し登場する。「近代の初頭から、非道な戦争や独裁体制、飢餓や先行き不安から逃れようとする難民が玄関のドアをたたき続けてきた」。著者はまず、人類学的にも人間が移動を続けてきたこと、「私たち」の玄関の前に訪れてきたことを指摘する。しかし同時に、「玄関の内側にいる人々」にとって、難民は今でも見知らぬ人々であることに変わりはない。なぜ、現代において「移民危機」が「政治的に正しいコードネーム」として取り扱われ、「私たち」はメディアの伝える移民の悲劇的な映像に祝祭的な連帯を触発されながらも、それは長続きせずむしろ日常化して、その分断は深化し続けているのか。グローバル化による相互依存からは後戻りできない所与の事実を前にして、「見知らぬ人々」に対する不安や恐怖心を抱かせるメカニズム、また、「私たち／見知らぬ人々」に分断される関係性について理論的に分析している。

国境の内側にいる「私たち」が難民に覚える不安は、すでに認知し想定していた不安の現実化であると理解できる。社会的地位や社会的承認、アイデンティティが労働の柔軟化に伴い不安定となった社会で、国境の内側でさえ敬意や配慮を拒まれ、「最底辺」に放置されてきた人々にとっては、「下には下がいる」という事実の発見が自尊心を取り戻せる機会となっている。それと同時に、難民は「地球の端からわれわれの玄関先に不吉な知らせを運んでくる」（ジョナサン・ラザフォード）存在でもある。「自らの選択ではなく冷酷な運命の評決によって放浪者となったそれらの人々は、苛立たしくて癒しがたいほど脆弱な私たちの立場や、私たちが苦勞して勝ち取った幸福のもろさを思い起こさせる」。このように、意識的に見ようとするまいとしてきた写し鏡のような存在との間にある分離に対して、著者は「オンライン／オフライン」という概念を提示している。オフラインの世界では、予想可能なサンクションの下で、意識的に自分の役割や義務と権利のバランスを維持し調整しなければならない。私たちは一方でそのような複雑性に満ちた「支配される側」に帰属している。逆にもう片方のオンラインの世界では、ルールを設定して追放や排除といった手段を用いて処罰と報酬を行い、他人を帰属させる「支配する側」にいる。オフラインの「混成的で他律的で多声的で、選択を続けなければならない」世界の不確実性と困難は、それだけオンラインに約束された単純さと容易さを魅力的にする。“見知らぬ人が扉をたたいている”とき、未知のものを前にした恐怖心と悲惨さを目にして生じた道徳的な衝動は葛藤状態に陥る。オンラインという「濾過装置」はその葛藤に「大いなる単純化」をもたらす。自分には制御できない力によってもたらされた環境の下で、その運命を自分のものとして受け入れることもできれば、自分をそこに押しやった加害者に「認識しやすい顔」をつけることもできる。扉の外にいる人間を締め出しながら、「私たち／見知らぬ人々」の境界線を強固にする背景に、私たちの側にそうした分離の形式が存在している。他方では、このような人々の緊張状態の中であって、政治がその存在を際立たせることを著者は指摘している。政治やメディアの用語として一般化された「安全保障化」という言葉が発せられると、それぞれの不安や恐怖心に場当たりの（それがどんなに論拠に乏しくとも）原因が明らかにされ、自分の与りえない力によって“哀れな”立場に置かれた人々の上に覆いがかけられる。そして、彼らに対する道徳的な義務の圧力を免れ得なかった私たちの良心は、それを覆い隠したもののへの感謝だけは忘れない。結果的に「私たち／見知らぬ人々」の境界線は、あらゆる他者との相互不信を深めながら、道徳的な責任の及ぶ視界の外、「私たち」の世界から隔絶されたところに「残りの人々」を生み出すことになる。したがって、そこにある最初の障壁とは「対話の拒絶」であり、「言い換えれば、無視や無関心から生じると同時に、それらをいっそう強める沈黙である」と著者はいう。

難民問題への態度としての憎しみ、無関心または無視に、著者は「対話」による「相互理解」、「融合」を対置している。それだけみればとても陳腐な結論かもしれない。しかし、それがあまりに陳腐であるのは、もしかすると「私たち」の方がよく聞き慣れた、あまりに凡庸なものにとられがちだからではないか。結論だけを取り出すのではなく、この社会のあり方を提示し読み解いていく作業は、それとはほど遠くないところにあるオルタナティブな社会のあり方を想像する契機となるように思う。（長谷川 翼）